

1913－14年におけるT. S. エリオットの中道的思考 ： F. H. ブラッドリーと姉崎正治の影響

古賀, 元章
福岡教育大学

<https://doi.org/10.15017/16072>

出版情報 : *Comparatio*. 12, pp.8-21, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

1913-14年における T. S. エリオットの中道的思考
— F. H. ブラッドリーと姉崎正治の影響 —

古賀元章

ハーバード大学大学院生のときの 1913 年 6 月に、T. S. Eliot (1888-1965) はイギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley (1846-1924) の *Appearance and Reality* を購入し勉強している (Ackroyd 48)。以来、彼はこの哲学者に心酔したことは周知の事実である。1913-14 年に院生のエリオットは、観念論哲学者 Josiah Royce (1855-1916) のセミナー “A Comparative Study of Various Types of Scientific Method” に出席し 5 編の論文を発表している。これらの論文には、ブラッドリーの哲学を援用した彼の中道的思考が見られる。

同じ時期の 1913-14 年に、エリオットは少年の頃から関心があった仏教について、ハーバード大学招聘教授で宗教学者の姉崎正治 (東京帝国大学教授、1873-1949) の講義 “Schools of Religious and Philosophical Thoughts in Japan” から学んでいる。姉崎が彼に教えたことは、主に、中道思想の大乗仏教である。

このような論述から判断すると、ブラッドリーの哲学と姉崎正治の仏教論には似たような考え方が認められる。そこで、彼らの影響を受けて、当時のエリオットは中道的思考を形成していると思われる。では、彼の中道的思考の骨子はどのようなものであろうか。また、なぜ彼はこれら二人の考え方を共に受け入れることができたのであろうか。本稿の狙いはこれらの点を考察することである。

1

エリオットがジョサイア・ロイスのセミナーで最初に発表したのは、1913 年 12 月 9 日の “The Interpretation of Primitive Ritual” という論文である。この論文の詳しい記述内容は、Piers Gray が紹介している。 그레이 の紹介を参考にして論を進めることにする。¹

“The Interpretation of Primitive Ritual” の冒頭で因果関係と意味の解釈を問題提議した後で、エリオットは事実について次のように述べている。

Science of religion must be distinguished from Phil. of Religion. In the latter, the investigator ranges his ‘facts’ according to a definition of religion. This definition is never arrived at by a generation from the facts; because the facts are never just *those facts* until we have the definition. In the work of such older men as Max Müller, scientific definition is confused with philosophic interpretation: thus he says (Nature Religion 1888) ‘Religion consists in the perception of the infinite under such

manifestations as are able to influence the moral character of man'. This is not a generalization and cannot serve as a definition. (qtd. in Gray 109)

宗教哲学者は宗教の定義によって事実を分類する。しかし、宗教の定義は単に事実を集めた一般論から得られない。事実は宗教の定義があつて初めて事実となるのである。エリオットは、宗教の定義を確立することが一番重要であるという前提条件に立っている。このような考えをする彼から、ドイツの宗教哲学者ミュラー（1823-1900）の宗教が科学的な解釈であつて、宗教の定義でないと見なされる。

そこで、進化の観点からエリオットの事実論が示される。彼にとって事実は、有機体の辿る傾向とその環境との絶え間ない関係が価値の基準によって記述されるものである。有機体の自然進化を引き合いに出して、彼は人間の宗教や社会にはどのような基準があるのかを問うている。

この問いに答えるために、エリオットは次のような文章を書いている。

In the words of Durkheim ... the facts are 'particular societies which are, born, develop, die, independently from each other ... A people wh [ich] replaces another is not simply a prolongation of this other with some new characters, it is something other, it has some added properties, some less, it constitutes a new individuality, and all these distinct individualities, being heterogeneous, can not fuse (se fondre) into one continuous series, nor, above all, into a single series (une série unique).' (qtd. in Gray 114)

エリオットが言及する“particular societies ... a single series”は、フランスの社会学者Émile Durkheim（1858-1917）が著した *Les règles de la méthode sociologique* の第2章“Règles relative à l'observation des faits sociaux”の文章²の一部から英訳されたものである。彼は、事実が個々の社会的事実にあることや、ある民族の属性が別の民族の属性と比較することにより明らかになることを説いている。そのために彼が反対するのは、社会的事実や民族の属性を単一の連続として把握することである。

このようなデュルケームの見解を下敷きにして、エリオットは人間の宗教進化や社会進化を自然進化ではなく体系的に考える。

ロイスのセミナーに出席していたとき、エリオットは F. H. ブラッドリーの著書を熱心に読んでいた (Smith 194)。ブラッドリーの *Essays on Truth and Reality* には次のような文章が見られる。

'Facts' are justified because and as far as, while taking them as real, I am better able to deal with the incoming new 'fact' and in general to make my world wider and more

harmonious. The higher and wider my structure, and the more that any particular fact or set of facts is implied in that structure, the more certain are the structure and the facts. And, if we could reach an all-embracing ordered whole, then our certainty would be absolute. But, since we cannot do this, we have to remain content with relative probability. (211)

諸事実の正当化の条件として、古い事実と新しい事実の調和が必要である。この調和ある世界の構造が高次で幅広くなり、そこに必然的に含まれる一連の事実が多くなれば、その構造も事実もより確かなものとなる。しかし、すべてのものを包括した全体を得られないので、われわれの満足は諸事実の相対的な可能性にとどまるのである。このようなブラッドリーの主張から明らかになるのは対象間の相関関係であろう。

ブラッドリーの哲学とデュルケームの考えは、個々の事実を重視する点で似通っている。エリオットはこの哲学者の相関関係論を踏まえて、中道的思考による持論を展開している。

次にエリオットの批評の対象はイギリスの人類学者 E. B. Tylor (1832-1917) である。タイラーの *Primitive Culture* の次のような文章が引用される。

‘[t]he ancient savage philosophers (sic) probably made their first step by the obvious inference that every man has two things belonging to him, namely, a life and a phantom.’ (qtd. in Gray 115)

人間性について古代未開人の賢者が推論することを持ち出すタイラーに言及して、エリオットは、“... we feel that this is what we should do were we in the savage’s place.” (qtd. in Gray 115) と書いている。上の引用文から彼が考えているのは、この人類学者が古代未開人の心の動きと現代人の心の動きを同一視していることである。

エリオットがタイラーの宗教論に反対する理由として、“in the words of M. Lévy-Bruhl, the uniformity of mind” (qtd. in Gray 115) であると記されている。この反対理由の拠り所とされているのは、フランスの社会学者レヴィ＝ブリュール (1857-1939) が批判するイギリスの人類学者たちの心性均一論である。³

そのときにエリオットが注意を払うのは事実と解釈の区別である。彼は事実を次のように論述する。

A fact is a point of attention which has only one aspect or [exists] under a certain definite aspect which places it in a system.... (qtd. in Gray 116)

事実が “a system” の中で考えられている。既述のように、彼の持論の背景にはブラッドリーの哲学（対象間の相関関係の強調）があったので、この語は諸事実間の相関関係によって

成り立つ体系を示唆する。そこで、彼にとって事実の实在化は、認識者が対象のある点に注意する瞬間ということになる。それは、認識者と対象の直接の結びつきを意味する。

このような事実論に基づいて、エリオットは解釈という概念を次のように提示する。

What seemed to one generation fact is, from the point of view of the next, a rejected interpretation. And an interpretation, *as such*, is neither true or false; but truth and falsity are relative to a level of interpretation. (qtd. in Gray 120)

ここでは、先の引用文での注意点が視点に言い換えられている。この視点の違いにより、ある世代の解釈が次の世代から拒絶されてしまう。その結果として、解釈の真偽ばかりではなく事実の真偽も、認識者と対象の相関関係で判断されることになる。

このように、一連の論考にはブラッドリーの哲学に依存したエリオット中道的思考がうかがわれる。

しかし、エリオットは “he appears to me to draw the distinction between primitive and civilized mental process altogether too clearly” (qtd. in Gray 122) と書いて、レヴィ＝ブリュールが原始人の心性と文明人の心性をはっきりと区別しすぎていることに反対する。エリオットはまた、デュルケームの社会的事実が社会を基盤とし、個人を強制していると見なして、“We are still I believe, at this point very far from having a firm grasp on a *fact*” (qtd. in Gray 123) と記している。

そこで、エリオットは社会現象の内外面に注目して、次のように書き記している。

...[I]f you take a purely external point of view, then it is not behaviour but mechanism, and social phenomena (and ultimately, I believe all phenomena) simply cease to exist when regarded steadfastly in this light. You *must* take into account the internal meaning: what is a religious phenomenon for example which has not a religious meaning for the participants? (qtd. in Gray 127)

デュルケームのように社会現象を外面から考えると、対象が人々の行動ではなく、彼らの機械作用になってしまう。そのため、社会現象（究極的にはすべての現象）は存在意義がなくなってしまう。また、社会現象の内面（ここでは宗教儀式）に注意を払うとき、エリオットは、参加者たちにとって宗教儀式の内面的意味が必要でない場合を想定する。

こうして、社会現象の内外面から考察しても、事実の实在を認識できないのである。このような見解に立って、彼は確かな事実が “the actual *ritual*” (qtd. in Gray 128) であると主張する。これが、1913年の論文における因果関係と意味の解釈についての結論でもあると言える。

こうした考察から判明するのは、事実認識の原点が〈今・ここ〉だということである。こ

の原点に関しても、ブラッドリーの哲学の影響が見られよう。エリオットは“Leibniz' Monads and Bradley's Finite Centres” (1916) の中で、この哲学者に触れて次のように書いている。

The Absolute responds only to an imaginary demand of thought, and satisfies only an imaginary demand of feeling. Pretending to be something which makes finite centres cohere, it turns out to be merely the assertion that they do. And this assertion is only true so far as we here and now find it to be so. (202)

完全無欠な存在であるブラッドリーの絶対者は、われわれの想像や感情の範疇でしか考えられない存在である。そこで、われわれが自らの有限な心の中心を一貫性のあるものにしようとしても、絶対者はわれわれの主張にすぎない。しかし、その主張は〈今・ここ〉においてのみ真実なのである。

そこで、ブラッドリーの哲学概念〈今・ここ〉はわれわれの事実認識の原点でもある。先のエリオットの言葉 (“the actual *ritual*”) にはこのような哲学概念が反映されていたと言よう。

1913年の論文におけるエリオットの記述内容から判断して、彼の事実認識の骨子は次のように要約できよう。

- ① 出発点は〈今・ここ〉で認識者と対象の直接の結びつきである。
- ② 認識者と対象は相関関係にある。

②は彼の中道的思考を表しているのので、①はこの思考の出発点にもなっている。したがって、事実認識の骨子は、同時に彼の中道的思考の骨子でもある。

2

1913年12月16日にエリオットは“Communication and Inspection”という見出しのある論文“Communication and Interpretation” (Jain 287n) をロイスのセミナーで読んでいる。彼が問う“*What is the status of a fact which includes a belief or a meaning?*” (qtd. in Smith 83) をめぐって、二人は次のようにやり取りする。

Royce : Phenomenology of a religion is science of religious expressions, without paying *much* attention to the meaning. The Roman Catholic believer has a share in a certain “passive infallibility.” People are fallible on the question as to *on what* decrees of the Pope are infallible. The believer carries out what the priest says.

No one adequately understands, and they admit it.

Eliot: I see there facts, but I am not sure what the facts are. What is he sincere about? *Behavior is the chief fact you have.* (qtd. in Smith 83)

ロイスは事実を宗教現象の外側から考えている。その例として、ローマ・カトリック教徒が司祭の話すことを信じて疑わない行動が取り上げられている。しかし、エリオットはこの事実が何であるかを問題にしている。彼にとってロイスの考えは、1913年の論文での思考パターン（外側からの現象理解→機械作用を対象）を踏襲していると判断しているのである。その判断はエリオットの事実論の骨子に基づいている。

エリオットは1914年2月24日に“Description and Explanation”をロイスのセミナーに提出している。そこでは、宗教現象の確かな意味が述べられている。それは、たとえば、儀式を行う原始人の意志である。彼の発言の“Points-of-view monadology” (qtd. in Smith 119) には、“Not wholly false nor true that an explanation is wholly wrong.” (Smith 119n) という欄外のメモが書かれている。彼の発言とこのメモからわかるのは、視点が変わると説明の正誤が一定でない、ということである。そこで、はっきりと説明できるのは、原始人の意志そのものである。

“Cause as Ideal Construction”という見出しのあるエリオットの論文が、1914年3月17日に大学院生の Narendra Nath Sen Gupa によって代読されている。この論文はレヴィ＝ブリュールの「融即の法則」⁴ (“loi de participation”) を土台にして、因果関係、偶然、意志が観念的な構成体であることを説いている (Smith 138)。

ここでは意志に焦点を当ててみよう。レヴィ＝ブリュールは、原始人の心性が西洋流の矛盾律では説明できないことを主張する。たとえば、ブラジルのボロロ族は、人間であると同時にインコであると信じる。彼は「融即の法則」がこうしたボロロ族の心性に見られることを述べている。⁵ エリオットはこの法則を手がかりにして、原始人の意志を直接に把握することができないと考える。そこで、解釈を通して自他の意志を理解することになるので、意志は客観的に実在するのではなく、われわれの頭の中で考え出される。彼によれば、意志は観念的な構成体なのである。事実と意志は分かれて個別に存在しないのである。そのことは、彼が書いた“there is nothing strictly fact and nothing strictly ideal.” (qtd. in Jain 142) から推し量ることができる。

エリオットは1914年5月5日に“Classification of Types of Object”をロイスのセミナーで読み上げている。この論文は、前回の論文で言及された観念と事実の関係をさらに追及する。セミナーの記録係である Harry T. Costello はその展開について、“In [an] idea there is only the *reference* and not the material part of the sign. Then there are facts.” (Smith 173) と書き記している。この内容から推察すると、事実はわれわれが志向する行為において対象となるのである。そのとき、事実を事実として認識するのがわれわれの観念である。換言すれば、事実とわれわれを取り持つのが観念である。

1913年12月9日以後のエリオットの論文における記述内容を振り返ってみたい。彼の事実論の骨子①を軸にして、②（ここでは、事実と意志の相関関係、事実と観念の相関関係）が展開されている。ここでも、ブラッドリーの哲学の影響を受けて、彼は中道的な立場で思考している。

3

少年の頃、仏教の開祖 Gautama Buddha の生涯を著したイギリスの詩人 Sir Edwin Arnold (1832-904) の叙事詩 *The Light of Asia* を読んで感動したことを、後年エリオットは述懐する (“What is Minor Poetry?” 42)。以来、仏教に興味を抱いていた彼は、ハーバード大学大学院生のとき、招聘教授で東京帝国大学教授の姉崎正治が講義する “Schools of Religious and Philosophical Thoughts in Japan” を受ける。エリオットは、1913年10月から1914年5月5日までの受講を「ノート」⁶ に書き残している。国内外の研究者が伝える「ノート」の断片的な記述内容を参考にして、姉崎の彼への影響の痕跡を論じたい。

姉崎が講義でエリオットに教えたことの一部は、『法華経』、インド大乘仏教の中観派^{ちゅうがんぱ}とその祖 Nāgārjuna、日本仏教の発展（天台宗、日蓮を含む）(Kearns 76-77) である。ここでは、インドのナーガールジュナと天台宗に焦点を絞ってみることにする。「ノート」は、“The version which Nagarjuna had was different from the present Pali text.” から始まっている（嶋田 11）。“The version” は、ナーガールジュナがサンスクリット語で書いた『中論』を指す。同書第1章の帰敬偈には次のような文章がある。

〔何ものも〕滅することなく（不滅）、〔何ものも〕生ずることなく（不生）、〔何ものも〕断滅ではなく（不断）、〔何ものも〕常住ではなく（不常）、〔何ものも〕同一であることなく（不一義）、〔何ものも〕異なっていることなく（不異義）、〔何ものも〕来ることなく（不来）、〔何ものも〕去ることのない（不去）〔ような〕、
〔また〕戲論^{けいろん}（想定された議論）が寂滅しており、吉祥である（めでたい）、そのような縁起を説示された、正しく覚ったもの（ブッダ）に、もろもろの説法者のなかで最もすぐれた人として、わたしは敬礼する。（『中論』（上）85）

「滅することなく」から「去ることのない」までは八つの否定辞となっているので、この帰敬偈は八不の偈と言われている。エリオットは八不を “the sharp sword of eightfold negation”（嶋田 15）と「ノート」に記している。否定は否定であり、肯定は肯定であるという通常の考え方（戲論⁷）が打ち消されている。ゴータマ・ブッダの唱える〈縁起〉⁸ が、こうした通常の考え方の代わりに持ち出されている。〈縁起〉もブッダの〈中道〉⁹ に基づく〈空〉¹⁰ によって成り立つのである。そこで、ナーガールジュナは三つの真理（〈空〉、〈縁起〉、〈中道〉）を悟ったブッダに皈依する。¹¹

インドの論師¹²が強調するのは、一切のものは本来〈空〉であり、〈縁起〉によって初めて存在することである。それは、一切が相関関係にあることを意味する。

エリオットは、天台宗について次のような文章も書き綴っている。

Tendai wishes to keep both diversity and unity, explaining the latter by the former.
(qtd. in Perl and Tuck)

姉崎はハーバード大学で、1913年から2年間にわたり日本宗教史を講義している(『新版 わが生涯 姉崎正治先生の業績』103)。この講義の原稿を基にして *History of Japanese Religion* が出版されている (Preface v)。この英文著書における多様性と統一性に関する記述 (114-17) を参考にして、上記の文章内容を推察してみよう。どのような生き物にも共通した仏性がある。衆生は瞑想によって、生き物の多様性ばかりではなく統一性 (仏性¹³) にも目を開かれる。ブッダは、久遠の真理であり、どのような時でも衆生を救うことができる。ブッダは、多様性 (どこでも存在) と統一性 (衆生に共通した久遠の真理) を兼ね備えている。衆生は、自らの多様性を気づくことにより、救済者の統一性を理解する。こうした記述が上記の文章内容に反映されているであろう。

衆生は、瞑想の度合いにしたがって生き物の多様性と統一性を知るし、多様性のわが身の悟りの程度にしたがって、ブッダ (統一性) から救われる。そうすると、多様性と統一性は相関関係にあることがわかる。

ナーガールジュナの大乗仏教思想も天台宗の宗教も、ブラッドリーの影響を受けたエリオットの事実認識の骨子②を連想させる。

ナーガールジュナの『中論』第25章には次のような二つの偈が書かれている。

輪廻^{りんね} (生死の世界) には、ニルヴァーナと、どのような区別も存在しない。ニルヴァーナには、輪廻と、どのような区別も存在しない。(第19偈) (『中論』(下) 701)

およそ、ニルヴァーナの究極であるものは、[そのまま] 輪廻の究極でもある。両者には、どのような微細な隙間も、存在しない。(第20偈) (『中論』(下) 701, 703)

仏教の輪廻は、衆生が生死を繰り返して心の迷いの世界 (現実世界) をさまようことである。日本語で涅槃^{ねはん}と訳されるニルヴァーナ¹⁴は、衆生が煩惱に打ち勝って、心の安らぎを得る境地 (渴望する理想) である。一般的に、輪廻と涅槃は対立する概念である。しかし、ナーガールジュナはこれら二つの概念が同じであると主張する。彼が敬愛するブッダは、現実をありのままに観察して、既述した三つの真理 (〈空〉、〈縁起〉、〈中道〉) を悟った。彼はブッダの悟りを徹底させて、輪廻 即 涅槃という考えを提唱している。

輪廻 即 涅槃から浮き彫りになるのは、現実を肯定し、〈今・ここ〉で認識者と対象との直

接の結びつきを認識の出発点にすることである。

姉崎は講義で、“the idea of the salvation of the self through saving others (Jain 199) も話している。それは、他人（他利）＝自分の救済（自利）を考える大乘仏教の菩薩¹⁵についてである。彼は参考資料として、1912年の論文“Ethics and Morality (Buddhist)”の別刷りを配布している（Kearns 77）。この論文では、大乘仏教の理想である菩薩は自利のためにも他利を重点に置いて、人々を自分と同じ悟りへ導こうとする（452）。菩薩の救済の目的地は自ら悟りを求めた所ということになる。そうすると、菩薩の救済の出発点は、〈今・ここ〉で衆生との直接の結びつきである。

インドの論師の輪廻即涅槃も、大乘仏教の菩薩観も、ブラッドリーの影響を受けたエリオットの事実認識の骨子①を思い出させる。

4

なぜ、エリオットはブラッドリーの哲学と姉崎の仏教を共に受け入れることができたのであろうか。この受容はエリオットの中道的思考とどのような関係になっているのであろうか。これらの問題について検討してみたい。

姉崎がヨーガ学派¹⁶の实在観と仏教大衆部のある学派¹⁷の实在観の違いを語ったとき、エリオットは次のような文章を書いている。

The Tathāgata is always in Yoga, near sleeps or dreams. He is omniscient in any single moment—this becomes lotos on important tenet.—His being—become the whole cosmos.

One section of Mahasamghika went another in distinguishing the appearance and the real, & thought these two to be an uncompromising antithesis (Bradley). loka artha and parama artha. (村田 32 に引用)

如来は常にヨーガの中にある。睡眠の近く、夢の中に。「如来」はあらゆる刹那に遍在する。(中略) これは重要な教義の蓮華となる。(中略) この存在が全宇宙となる。

大衆部の一派は別の道を辿り、実在的なものと観念的なものや思考を区別するに至る。これら二つは絶対に相容れない対立となる(ブラッドリー)。世俗と勝義。(村田訳、同 32)

引用文の前半はヨーガ学派の实在観についてである。「如来」(真に実在するもの [村田 32]) はどのような瞬間でも、ヨーガ(統一された心的状態、主客統合の精神状態 [村田 32]) に現れる。これが重要な教義で蓮華と意味づけられ、「如来」が全宇宙を表す。引用文の後半は仏教大衆部のある学派の实在観についてである。ヨーガ学派の一元的な考えに対して、仏

教大衆部のある学派は、「実在的なもの」と「観念的なものや思考」とを区別する二元的な考えをする。「観念的なものや思考」は「世俗¹⁸」であり、「実在的なもの」は「勝義」である(村田 32)。仏教大衆部のある学派の実在観を聞くと、エリオットはブラッドリーの名前を括弧の中に書き込んでいる。ブラッドリーは、ヨーガ学派のように、一元論的な実在観(たとえば、本稿で言及したこの哲学者の絶対者観を参照)を唱えている。したがって、彼は仏教大衆部のある学派の二元論的な実在観を学んで、この哲学者を思い出しているのである。

エリオットは、姉崎の講義を受けていたとき、ブラッドリーの哲学で理論武装してロイスのセミナーで論文を発表していた。姉崎が講義する大乘仏教は、ブラッドリーの哲学と共に、その後のエリオットの中道的思考による文筆活動(たとえば、学位請求論文、¹⁹ 詩論、²⁰ 文学批評論、²¹ 文化論、²² 教育論²³)にインパクトを与えている。したがって、エリオットはブラッドリーの哲学ばかりではなく、当時の姉崎の講義にも共感を覚えたと言える。そうすると、彼はロイスのセミナーで持論を展開していた際に、ブラッドリーと同じような考えが認められる仏教思想も強く意識していたであろう。

J. H. Woods への 1915 年 1 月 28 日付の手紙の中で、エリオットは懐疑主義的な性格であることを述べている(*The Letters of T. S. Eliot* 84)。この性格が彼の事実認識の骨子①に反映されていると思われる。また、Norbert Weiner への同年 1 月 6 日付の手紙(*Letters* 79-89)や Conrad Aiken への翌年 8 月 21 日付の手紙(*Letters* 146)の中で、彼は相対主義的な性格であることも述べている。この性格が同じ骨子の②に反映されているように思われる。ロイスのセミナーで事実の実在を探究するとき、彼は同じようなこれらの性格が見られるブラッドリー²⁴の哲学に学問的な裏付けを見出している。この学問的な裏付けを支えるものが、ブラッドリーの哲学と似通った考え方をする大乘仏教であったと判断される。

このような背景の中で、1913-14 年のエリオットは中道的な思考を展開していったと言えよう。

注

1. この点については、拙稿「T. S. エリオットの事実論についての序説」を基にして展開していることとお断りしたい。
2. *Les règles de la méthode sociologique* 20: "... des sociétés particulières qui naissent, se développent, meurent indépendamment les unes des autres.... Un peuple qui en remplace un autre n'est pas simplement un prolongement de ce dernier avec quelques caractères nouveaux; il est autre, il a des propriétés en plus, d'autres en moins; il constitue une individualité nouvelle et toutes ces individualités distinctes, étant hétérogènes, ne peuvent pas se fondre en une même série continue, ni surtout en une série unique."

3. Lévy-Bruhl 5-19 を参照。
4. 「融即の法則」については、次のような解説を参照。
 「未開人の心性の特徴としてレヴィ＝ブリュールの用いた言葉で、一個の事物あるいは人間をそれ自身であり、また他のものでもあるとするような思考の型をさす。例えば、ある部族は自分たちがいまある通りの人間であると同時に「金剛インコ」でもあると信じている。レヴィ＝ブリュールはこのような心的活動を西洋的な論理法則に対比して「論理以前の」とも述べている。」(『縮別版』社会学事典』886)
5. Lévy-Bruhl 77-78 を参照。
6. この「ノート」は、ハーバード大学ホートン図書館に保存されている。そこでは、“T. S. Eliot, Notes on Eastern Philosophy, A. MS. and TS. (carbon copy) with A. MS. annotations; 3 Oct.[1913] – 15 May [1914]. 62 s. (80p.) T. S. Eliot Collection, The Houghton Library, Harvard University” と書かれている (村田 561 注)。
7. 〈戲論〉については、下記の解説を参照。
 「竜樹(ナーガールジュナ)によれば、戲論は妄分別、さらには業と煩惱を生む原因であり、それは空性を知ることによって滅するという。」(『岩波仏教辞典 第二版』280)
8. 〈縁起〉については、下記の解説を参照。
 「縁って生起すること。ゴータマ・ブツダ(釈迦)の悟りの内容を表明すると伝えられる、仏教の根本教理の一つ。生存の苦悩はいかにして生起し、また消滅するのかを示す、諸法の因果関係。」(同 95)
9. 〈中道〉については、下記の解説を参照。
 「相互に矛盾対立する二つの極端な立場(二辺)のどれからも離れた自由な立場、〈中〉の実践のこと。〈中〉は二つのものの中間ではなく、二つのものから離れ、矛盾対立を超えることを意味し、〈道〉は実践・方法を指す。仏陀は苦行主義と快楽主義のいずれにも片寄らない〈不苦不楽の中道〉を特徴とする八正道によって、悟りに到達したとされる。仏陀はまた、縁起の道理にしたがう諸法は、生じるのであるから無ということではなく、また滅するのであるから有ということはないという意味で、〈非有非無の中道〉であると説く。」(同 714-15)
10. 〈空〉については、下記の解説を参照。
 「固定実体の無いこと。実体生を欠けていること。」(同 238)
11. この点については、下記の解説を参照。
 「竜樹の『中道』は、縁起・空性・仮・中道を同列に置いているが、これは、すべてのものは縁起し空であると見る点に中道を見、空性の解明によって中道を理論づけるものである。」(同 715)
12. 経・律・論の三蔵のうちの、とくに論蔵に精通した人を指す。(同 1077)
13. 仏性については、下記の解説を参照。
 「衆生が本来有しているところの、仏の本性にして、かつまた仏となる可能性の意。」(同 874)

14. ニルヴァーナ（涅槃）については、下記の解説を参照。
「^{ぼんのう}煩悩を断じて絶対的な静寂に達した状態。仏教における理想の境地。」（『広辞苑 第五版』2071）
15. 大乘仏教の菩薩については、下記の解説を参照。
「大乘仏教においては、最高の悟りを求める心（菩提心）をおこして、自らの修行の完成（自利）と一切衆生の救済（他利）のために六波羅蜜を行じて成仏を目指す人はすべて〈菩薩〉なのである」（『岩波仏教辞典 第二版』922）
16. ヨーガ学派については、〈ヨーガ〉の下記の解説を参照。
「基本的には、^{ほだつ}解脱（悟り）に向けてのなんらかの〈実践〉〈修行〉、特に〈精神統一〉と解し得る。
その起源をインダス文明にまで辿りうるといわれる、ある点では曖昧模糊としたこの〈ヨーガ〉という語の意義を明確にしたのは、その名前を付せられたインドの六派哲学の一派〈ヨーガ学派〉である。その成立への仏教からの影響も看過しえぬほか、有神論という点では区別されるものの形而上学をほぼ同じくする点でサーンキヤ学派とは密接な関係を指摘される。」（同 1029）
17. 村田氏は僧祇部などを考えている（32）。僧祇は「教団を構成する衆層」（『岩波仏教辞典 第二版』631）である。
18. 世俗と後述する勝義については、勝義の下記の解説を参照。
「大乘仏教では、〈勝義〉と〈世俗〉の二つの真実（二諦）があると説く。〈世俗〉は常識的真実、〈勝義〉は超世間的な真実で無分別知の対象である。」（同 515）
19. 拙稿「学位請求論文（第1章～第2章）における T. S. エリオットの中道的思考」及び「学位請求論文（第3章～結論）における T. S. エリオットの中道的思考」を参照。
20. 拙稿「詩に対する T. S. エリオットの実在観」を参照。
21. 拙稿「T. S. エリオットの文学批評論」を参照。
22. 拙稿「*Notes towards the Definition of Culture* における T. S. エリオットの中道的思考の文化論」及び「T. S. エリオットのヨーロッパ文化の統一論」を参照。
23. 「T. S. エリオットの中道的思考の教育論」を参照。
24. ブラッドリーの相対主義的な性格は、本稿で引用した彼の文章によって判断できよう。この哲学者の懐疑主義的な性格については、次のような彼の文章から推察できよう。

An honest and truth-seeking scepticism pushes questions to the end, and knows that the end lies hid in that which is assumed at the beginning. (*Appearance and Reality* 379)

引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Anesaki, Masaharu. "Ethics and Morality (Buddhist)." Vol. 5 of *Encyclopaedia of Religion and Ethics*. Ed. James Hasting. New York: Charles Scribner's Son, 1912. 12 vols, indexes. 447-55. 1908-22.
- . *History of Japanese Religion: With Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*. 1963. London: Kegan Paul, Trench, Trubner, 1930. Tokyo, Charles Tuttle, 1966.
- Bradley, F. H. *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay*. 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.
- . *Essays on Truth and Reality*. 1914. Oxford: Clarendon P, 1962.
- Durkheim, Émile. *Les règles de la méthode sociologique*. 1937. Paris: Presses Universitaires de France, 1992.
- Eliot, T. S. "Leibniz' Monads and Bradley's Finite Centres." 1916. *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber, 1964. 198-207.
- . "What is Minor Poetry?" 1944. *On Poetry and Poets*. London: Faber and Faber, 1957. 39-52.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Gray, Piers. *T. S. Eliot's Intellectual and Poetic Development, 1909-1922*. Brighton, Sussex: Harvester P, 1982.
- Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- Kearns, Cleo McNelly. *T. S. Eliot and Indic Traditions: A Study in Poetry and Belief*. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- Lévy-Bruhl, Lucian. *Les fonction mentales dans les sociétés inférieures*. Paris: Librairie Felix Alcan, 1928.
- Perl, Jeffrey M., and Andrew Tuck. "The Hidden Advantage of Tradition: On the Significance of T. S. Eliot's Indic Studies." *Philosophy East and West* 35.2 (Apr. 1985): 115-31.
- Smith, Grover, ed. *Josiah Royce's Seminar, 1913-1914: As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello*. New Burnswick, NJ: Rutgers UP, 1963.
- 姉崎正治著. 姉崎正治先生生誕百年記念編. 『新版 わが生涯 姉崎正治先生の業績』. 東京: 大空社, 1993.

- 古賀元章. 「T. S. エリオットの事実論についての序説」『比較文化研究』33 (1996):60-69.
- … 「学位請求論文 (第1章～第2章) における T. S. エリオットの中道的思考」『熊本大学
英語英文学』40 (1997):1-12.
- … 「詩に対する T. S. エリオットの実在観」『英語英文学研究』41 (1997):27-37.
- … 「*Notes towards the Definition of Culture* における T. S. エリオットの中道的思考の文
化論」『比較文化研究』35 (1997):148-61.
- … 「学位請求論文 (第3章～結論) における T. S. エリオットの中道的思考」『比較文化研
究』41 (1998):49-58.
- … 「T. S. エリオットの中道的思考の教育論」『言語文化学会論集』10 (1998):139-51.
- … 「T. S. エリオットのヨーロッパ文化の統一論」『比較文化研究』40 (1998):82-91.
- … 「T. S. エリオットの文学批評論」『水産大学校研究報告』47 (1999):253-64.
- 三枝充恵. 『中論』(上). 1984. 東京: 第三文明社. 1992. 全3冊 (上・中・下). 1984.
- … 『中論』(下). 1984. 東京: 第三文明社, 1991.
- 嶋田和子. 「1931 秋: The Mazes of Patanjali's Metaphysics — T. S. エリオット, *Notes on
Eastern Philosophy* から —」. 『アレーティア』11 (1995):5-19.
- 中村 元・福永光司・田村芳朗・今野 達・末木文美士. 『岩波仏教辞典 第二版』. 1989. 東
京: 岩波書店, 2002.
- 新村 出編. 『広辞苑 第五版』. 1955. 東京: 岩波書店, 1998.
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編. 『〔縮別版〕社会学事典』. 1994. 東京: 弘文堂, 2001.
- 村田辰夫. 『T. S. エリオットと印度・仏教思想』. 東京: 国文社, 1998.